海の底から

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の底から

【Ｎコード】

Ｎ２５６２Ｐ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

太平洋を進む船。その船に乗る船員達が見たものは。こうしたお話が昔から結構あったりします。

第一章

海の底から

船は大海の真ん中にいた。
かなり大きな船だ。太平洋を行き来できるだけのだ。その船の中においてである。若い船員が年配の船員に対して不意に尋ねてきた。
「あの」
「何だ？どうした？」
年配の船員の顔は髭だらけである。顔の下半分に見事な黒い髭がある。それを見ると何か海賊の様である。その顔の彼が若いまだニキビのある船員に言葉を返した。
「何か見つかったか？」
「いえ、ふと思ったんですけれどね」
若い船員はそのニキビの顔で言うのである。
「この海の底にはですね」
「海の底には？」
「何がいるんでしょうね」
こう言うのである。
「一体何が」
「ああ、それな」
「それは？」
「結構色々なのがいるぞ」
こう若い船員に話す。
「色々なのがな」
「いますか」
「いるから。ただ」
「ただ？」
「物凄いのがいるからな」
年配の船員の顔は真面目なものになっていた。二人は今甲板にい

る。休憩の時間で甲板に出て海を見てだ。そのうえで話をしているのだ。
「凄いのが」
「そんなに凄いんですか」
「深海魚だっているしな」
まずはこれを話に出す。
「それは知ってるよな」
「気持ち悪い魚ばかりいますよね」
「まずはそんな連中がいるんだ」
こう年配の船員は話す。
「しかしな」
「しかし？」
「それだけじゃないからな」
年配の船員は笑顔になっていた。
「例えばだ」
「まだいるんですか」
「ああ、今丁度な」
年配の船員が話す。それが何かというとだ。
「海を見ろよ」
「海ですか」
「ああ、海だ」
右手に広がるだ。その海を見ての言葉だった。
「海を見ろ。何か見えないか？」
「何がですか？」
「ほら、出て来たぞ」
こうしてだった。海からだ。何と巨大な烏賊に噛み付いている獰猛そうな鯨が出て来たのだ。その大きな頭が実によく目立つ。
「あれだよ」
「マッコウクジラですか？それであの烏賊は」
「ダイオウイカだ」

それだというのであった。
「鯨と烏賊の戦いだよ」
「何か凄いんですが」
見ればだ。海面に出てからも激しい格闘を行っている。鯨は烏賊を食い千切らんとしており烏賊はその鯨に絡み付く。そうして激しい攻防を繰り広げていた。
「あれって」
「はじめて見たか」
「噂には聞いてました」
こう答えはした。
「ですがそれでも」
「凄いだろ」
「あれも海の底から出て来たものですか」
「そうだ」
年配の船員は笑みを浮かべて言い切ってみせた。
「ああいうのもいるんだ」
「何か怪獣映画ですね」
「そうだ、海の底は凄いんだ」
鯨と烏賊はまだ格闘を続けている。若い船員はそれをまだ驚いている目で見ていた。年配の船員はその彼に話すのだった。

第二章

「何がいるかわからないぞ」
「そうですね。そういえば」
今度はだ。若い船員が言ってきた。
「これも聞いた話ですが」
「んっ！？何だ？」
「海の底に凄い怪物がいるらしいですね」
こう言うのである。
「何でも」
「怪物か」
「ほら、シーサーペントとかいう」
この存在のことを言うのだった。
「そういうのもいるとか」
「おいおい、それはあれだぞ」
年配の船員はこのシーサーペントのことには笑って返してきた。
「伝説だぞ」
「伝説ですか」
「ああ、伝説だ」
それだというのである。
「絶対にいる筈がないぞ」
「そうですか」
「確かに色々な話があるさ」
「はい」
「それでもな。実際にいるかどうかってなるとな」
そしてだ。若い船員にこう言ってみせた。
「いないな、そんな大昔の巨大な恐竜の生き残りなんてな」
「そうですか」
「ああ、いない」

彼は笑って断言してみせた。
「間違いなくな」
「何だ、そうなんですか」
「そうだよ。いないよ」
彼はまた言った。何時の間にか鯨と烏賊は海の中に消えた。どうやらそのままま闘っているようである。とりあえず彼等からの注意は外れていた。
そしてだ。話も一段落した。年配の船員は若い船員に言った。
「じゃあそろそろ中に戻るか」
「そうですね。コーヒーでも飲みますか」
「ああ、そうしような」
こう話してだった。そのうえで実際に船の中に戻ろうとする。しかしここでだった。
白髪の船員が出て来た。二人と同じ服を着ている。その顔は狼狽したものだった。
「お、おい！見ろ！」
「見ろって」
「何かあったんですか？」
「これを見ろ、すぐにだ」
こう言ってだ。何かを出してきた。それは。
ソナーの反応だ。それを紙に出していたのだ。海の中に危険なものがないかどうかをチェックしているのである。尚海の上はレーダーで行っている。
そしてその紙を二人に見せる。そしてまた言ってきた。
「これ、何だと思う？」
「何だとって」
「これですか」
「ああ、これだ」
その紙の一点を指差す。するとだ。
首が細長い。頭は小さい。そして楕円形の身体に四つの鰭の足が

ある。尻尾は短い。それが何かというとであった。形だけでわかるものだった。
「恐竜、ですか？」
まずは若い船員が白髪の船員に言った。
「これって」
「そう思うか」
「はい、そう思います」
実際にこう答える彼だった。
「これって」
「そうだな。恐竜だよな」
「そうとしか思えませんよ」
「そんな筈ないだろ」
だがここでだ。年配の船員が顔を顰めさせて言ってきた。
「そんな、恐竜なんてな」
「しかしソナーには出てるぞ」
白髪の船員は眉を顰めさせて彼に反論する。
「こうしてな」
「この目で見ないと信じられるか」
それでも彼は言う。
「ソナーだって間違えるだろ」
「ソナーを疑うのか」
「何度も言うが目だ」
年配の船員は言い切る。

第三章

「そんなのな」
「信じないのならいいさ」
白髪の船員も喧嘩言葉になっていた。
「しかしそれでもな」
「ソナーにはっていうのか」
「ああ、間違いない。それにだ」
「今度は何だよ」
「目って言ったよな」
彼は年配の船員のその言葉を指摘してきたのだ。今度はだ。
「今確かに言ったな」
「ああ、言ったさ」
年配の船員もそれを否定しない。
「しっかりとな。言ったさ」
「よし、わかった」
それに頷く彼だった。そうしてだった。
「目で見るのなら信じろ。出て来たらな」
「出たら信じてやるさ」
年配の船員も喧嘩を買う形で述べた、
「その時はな」
「よし、それならだ。その言葉忘れるなよ」
「ああ、絶対にな」
二人がこう言い争っている間若い船員は今は海を見ていた。海は静かであった。だが先程のあの鯨と烏賊の格闘の時と同じくだ。それが出て来たのであった。
慌しくではなかった。静かであった。だがそれが出て来たのだ。
若い船員はそれを見てだ。船から転げ落ちんばかりに驚いて叫んだ。

「あ、あれは！」
「今度は何だ？」
「何が出たんだ？」
「あれ、あれを！」
それを指差して二人に叫ぶ。
「あれってまさか」
「な、何っ！」
「あれは！」
「ええ、それですよね！」
白髪の船員が持っているソナーを映し出した紙を指差しての言葉である。何と今海からでたそれとソナーに映っているそれがだ。同じものだったのだ。
「あれって」
「ああ、間違いない」
白髪の船員も呆然としながら話す。
「あれだよ」
「おい、嘘だろ」
年配の船員もその目を点にさせていた。
「本当にいたのかよ」
「けれど今実際に見ていますよね」
「ああ」
年配の船員は若い船員の言葉にこくりと頷く。
「見てるよ、確かにな」
「じゃあこれってやっぱり」
「ああ、シーサーペントだ」
年配の船員はそれだと指摘した。
「間違いない」
「本当にいたんですね」
「流石にこれはないと思ったがな」
「俺も最初は驚いたよ」

白髪の船員もここで話す。
「噂には聞いていたけれどな」
「しかし出て来ましたし」
「本当にいたなんてな」
「世の中本当にわからないな」
二人は首を傾げさせながら言った。
「いや、海の底ってのは」
「何がいるかわからないな」
「そうですね。本当に色々なのがいるんですね」
若い船員は首を捻りながら話した。
「凄いですね、海ってのは」
「俺もあらためて知ったよ」
「俺もだ」
二人は若い船員の言葉に頷く。
「いや、海ってのは」
「色々な生き物がいるな」
「全くですね」
三人はその首の長い、いる筈のない生き物を見ながら話すのだった。その生き物は彼等のことも船のことも気にする様もなく悠然と泳いでだ。そのうえでまた海の中に戻った。後には静かな海が残っていた。それだけであった。

海の底から　　完

２０１０・６・３

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2562p/

海の底から

2010年12月1日21時25分発行